

令和6年度
ふるさと常陸太田の歴史散歩

令和6年11月17日(日)

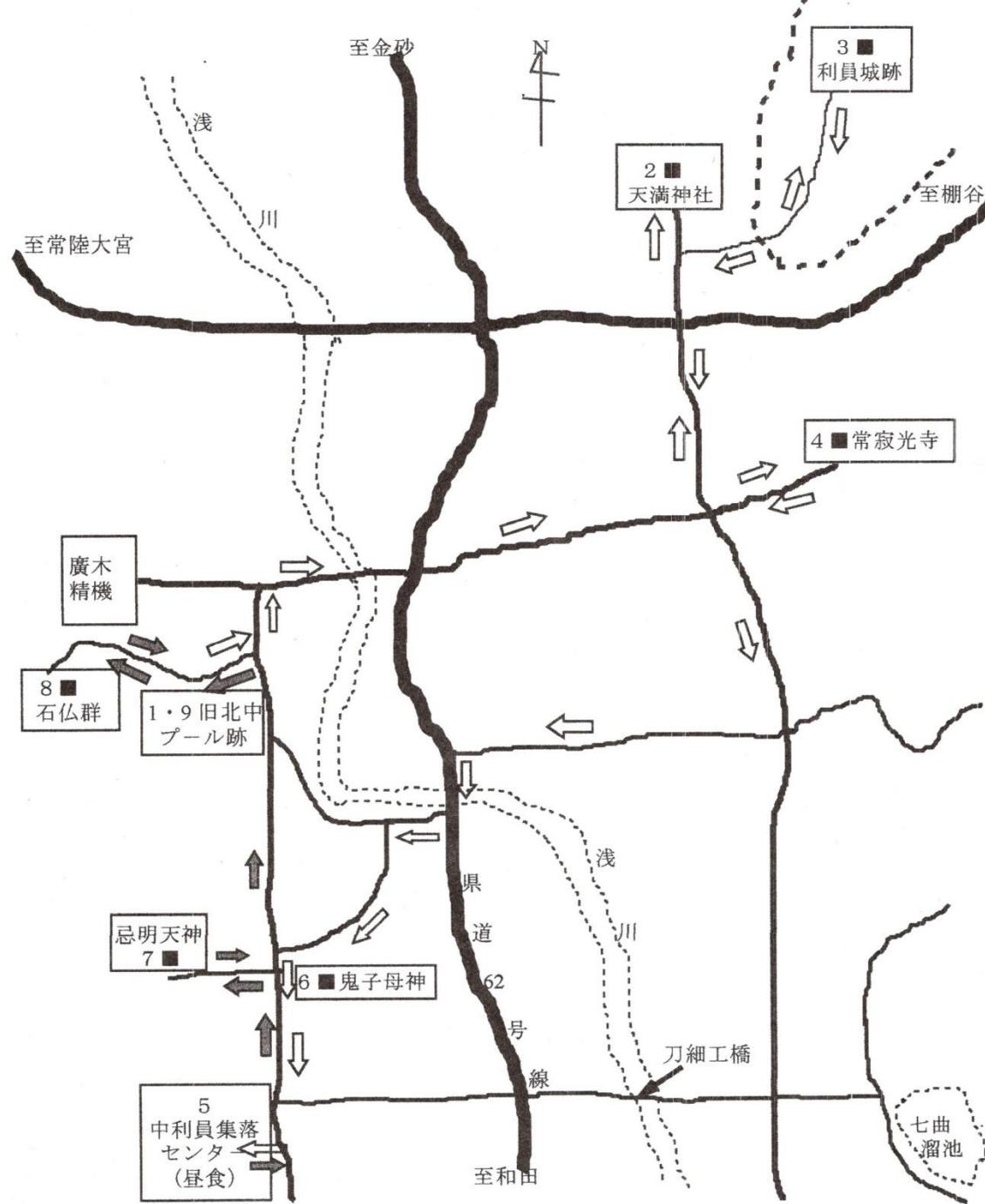
第3回『中利員の里めぐり』



常陸太田まちかど案内人の会

常陸太田の歴史散歩探索コース 11月17日(日)

中利員の里めぐり



<日 程>

1 旧北中プール跡 9 : 30	→ 2 天満神社 10 : 00	→ 3 利員城跡 11 : 00	→ 4 常寂光寺 11 : 30
5 中利員集落センター(昼食) 12 : 00 - 12 : 40	→ 6 鬼子母神 13 : 00	→ 7 忌明天神 13 : 20	→ 8 石仏群 13 : 50
9 旧北中プール跡 14 : 00			

第3回 ふるさと常陸太田の歴史散歩

—中利員の里めぐり—

目次

1. 中利員町について	3
2. 天満神社	4
3. 利員城跡	5
4. 常寂光寺	8
5. 鬼子母神	9
6. 忌明天神	10
7. 石仏群	10
8. 馬力神	11

1. 中利員町について

1. 中利員町の概要

美しい田園風景が広がる中利員町には、徳川光圀公にゆかりの日蓮宗の寺院である常寂光寺がある。日蓮宗と関係の深い鬼子母神の信仰が町内全体で盛んなところである。鬼子母神のほかにも、雷神様や馬力神の石碑など民間信仰にまつわるもののが町内各地にあり、現在でも地域の人たちの間で大切に受け継がれている。

『ひたちおおたてくてくウォーク 86 中利員町編』市教育委員会文化課

(2) 中利員町の変遷

古くは「年数村」といった。

文禄3年(1594)頃、上年数村、中年数村、下年数村に分かれ、「中年数村」となる。

近世(江戸期)に「年数」を好字といわれる「利員」に換えたと思われる。年数(かずとし)

「中利員村」は、江戸期～明治22年(1889)3月の村名

明治22年(1889)4月1日「中利員村」は「金郷村」となる。

金砂郷地区は、郡戸村、久米村、金郷村、金砂村の4村となる。

昭和30年(1955)4月15日 4村が合併して「金砂郷村」となる。

平成5年(1993) 「金砂郷町」となる。

平成16年(2004)12月1日 常陸太田市、金砂郷町、水府村、里美村が合併して「常陸太田市」となる。

現在の表記は、常陸太田市中利員町となる。

『金砂郷村史』

(3) 「年数」の地名由来

・年を数える(重ねる)ほど、長命な村になるようにという願望からの説がある。

<古者の話>より

・年数の「年」は1年中、「数」はかぜのなまり という。

この地形から、南北と北西からの風の通り道に

なっていて、1年中風が強く吹くところに由来する

という説がある。



中利員町付近の地形

『宮崎報国版 新編常陸国誌』 常陸書房 『茨城県地名大辞典』 角川書店

2. 天満神社

祭神 菅原道真
境内社 なし
氏子 中利員町の170戸
例祭 春季 4月25日
秋季 9月25日
由緒 元禄元年(1688)、徳川光圀公が
菅原道真公の神像をつくり、
当村にこれを祀らせたのが当社
の始まりという。現在、社殿内
には元禄3年(1690)の銘を有するご神像が祀られている。



菅原道真公を祀る天満神社

天満神社は全国に存在し、藤原時平の讒言により不遇を被った道真公の怒りを鎮めるため、道真公を神格化し、祀られるようになった御靈信仰の代表的な神社である。道真公は、天神とか天神さまとよばれている。

『金砂郷村史』

<参考>

菅原道真公について

生年 承和12年(845)6月25日
没年 延喜3年(903)2月25日
平安時代の貴族、学者、漢詩人、
政治家。参議 菅原是善の三男
官位は、従二位、右大臣



菅原道真公の肖像

忠臣として名高く、第59代宇多天皇に重用されて、寛平の治を支えた一人である。第60代醍醐天皇の世では、右大臣にまでのぼりつめたが、藤原時平の讒言(昌泰の変)により、太宰府へ左遷され現地で没した。

死後は怨霊になり、清涼殿落雷事件などで日本三大怨霊の一人として知られる。後に天満神社の神様として信仰の対象となり、現在は、学問の神様として親しまれている。太宰府天満宮の御墓所の上に本殿が造営されている。

『日本の歴史人物大事典』 矢部健太郎 著

3. 利員城跡



城縄張図(青木義一氏作成)



利員城鳥瞰図(青木義一氏作成)

(1) 利員城とは

城は南の久米、花房方面、北の山方方面、西の常陸大宮方面及び東の棚谷方面に通じる交通の要地に位置する。天然の水堀に相当する浅川が城の西を流れ、南西側の山地を越えると久慈川が流れている。

利員城は、令和5年(2023)、利員城保存会により龍貝城一帯の整備が行われ、藪に隠れていた遺構が確認できるようになり、城の構造がわかるようになった。城は山城部(龍貝城という)、居館部、出城そして城下町に相当する根小屋地区からなる大型の城郭であることがわかった。

(2) 利員城の城主について

- ① 城主には、川井氏(河合、河井、川合)、山縣氏、石突氏、前沢氏がみえる。
 - ② 1400年頃から戦国末期までの200年にわたり利員城に川井氏が関わっている。川井氏は美濃出身で佐竹13代義人(義仁)に仕えたとい。美濃佐竹氏との関係で常陸に来たと思われる。山縣氏の家臣として同行したのかもしれない。部垂の乱では佐竹宗家側に属し、一族より戦死者(川井玄蕃助信忠とその子主水佐忠連)が出ている。なお、河合城の川井氏とは別系統のようである。
 - ③ 山縣氏は、鎌倉末期に美濃から常陸に来ていたらしい。これも美濃佐竹氏との縁であろう。当初は山入氏の家臣だったと思われる。
- 応永21年(1417)に岩城氏家臣の岩崎氏が山縣三河守の篠城する城を攻めたとされるが、これが利員城であったらしい。

④ 石突氏は白河結城氏の家臣で、佐竹氏の軍事支援に来たものと思われる。石突氏が城主時代の文明10年(1478)、久米城合戦の頃、利員城には佐竹義治の四男義信がいたので客将という立場だったと思われる。茨城や秋田に移った佐竹氏の中にも名がみえないので、山入の乱が終息した頃にはこの地を去ったようである。

⑤ 前沢氏は山入の乱が終息後の永正3年(1506)頃、孫根城から佐竹義舜の脱出等を支援した功績で城主になったとされる。

以上、山縣氏、石突氏、前沢氏が城主として登場するが、川井氏の名は終始登場する。川井氏の位置づけは何か。城代なのか？ 現在、利員城付近には前沢姓、川井姓、山縣姓、石突姓の者はいない。

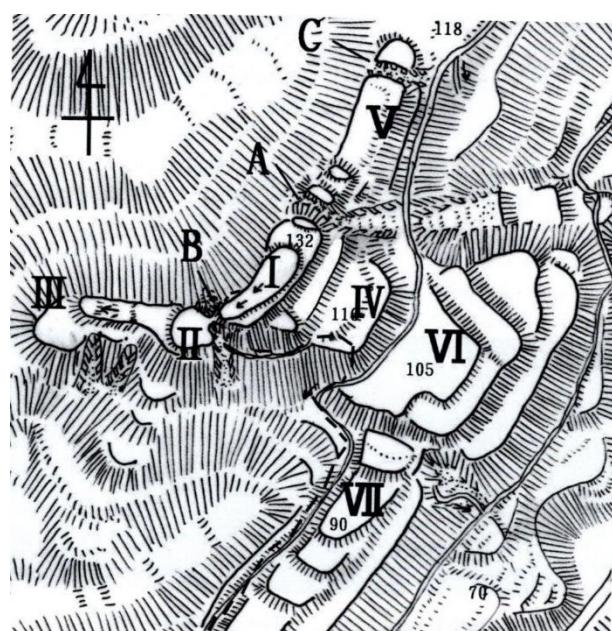
⑥ 現在、利員城付近には茅根姓が多い。茅根氏が最後の城主であろう。しかし、茅根氏が城主であったとする知行宛状等の史料は確認できない。おそらく、大橋城の茅根通忠が移った城が利員城であったようである。最後の城主の茅根氏は佐竹氏の秋田移封で秋田に去るが、残りの一族はこの地に住み、子孫が現在に続いている。

『常陸大宮市史 編さん過程での文献史料』より

(3) 利員城の構造



龍貝城遺構位置図(青木義一氏作成)



龍貝城縄張図(青木義一氏作成)

天満神社から金水トンネル方面まで山上に道が存在し、さらに金水トンネル付近から鷺山方面へと古道が通じており、龍貝城を囲む山の尾根上を一周できることが確認された。その古道沿いにいくつかの出城が確認された。

これらの出城の存在から利員城の範囲は龍貝城、居館付近だけではなく、金水トンネル付近まで広がる大きな城郭であったことがわかる。

① 龍貝城について

従来、本郭 I 周辺のみ、北端は堀切 C、南端は墓地があった付近 VII までが城域と認識されていたが、この部分は「内城」にあたる。

内城は本郭付近の主郭部と曲輪 VI、VII の二つの部分からなる。

主郭部は北西側の標高 120~130m の尾根状の山に曲輪 III、II、I の主郭部さらに曲輪 V が約 250m にわたり北東から西方向に湾曲して並ぶ曲輪群である。主郭部の北西側の斜面は急である。

最高地点、標高 132m にある曲輪 I が本郭である。約 60m × 25m の広さを持つ。北東側、二重堀切 A に面して低い土塁がある。本郭から二重堀切までの深さは約 6 m である。

曲輪 VI は標高 105m、約 60m × 40m の広さを持ち、城内で一番広い曲輪であり、内部は整地されている。この曲輪が龍貝城の主体部であり、城主や城番の駐留する小屋等があったと思われる。

② 居館部について

居館部先端の「堀の内」が居館の地である。標高 50m、約 100m 四方の規模、周囲は土塁と堀が巡っていたと想像できよう。現在、土塁が西側に、横堀が南側に残る。居館の西下が根小屋であり、浅川が水堀の役目を果たしていた。

③ 利員城のまとめ

利員城の規模は居館部や出城を含めると東西約 500m、南北 800m が城域という範囲になる。ただし、これは主要部のみであり、広義の利員城は金水トンネル付近を東端とした龍貝城を囲む山々の内側一帯が城域といえるであろう。

特に、金水トンネル付近で確認された沢泉寺砦、長者窪砦の存在は、棚谷方面、山入方面との連絡を重視している構造がみてとれる。利員城が山入城の西を守る拠点として築かれたことを裏付ける物証となろう。しかし、これだけでは利員城の本来の姿がみえたとはいえない。

* 最近の学説より(茨城史料ネット代表 茨城大学教授 高橋 修 先生)

下利員町の西光寺周辺の調査研究から、利員城には佐竹隆義が居城していたということが有力視されている。

龍貝城には馬出、舟形虎口など戦国後期の遺構が見られず、戦国中期の姿を留めている。戦国後期には使用していなかったと推定され、戦国後期は居館部付近が主体であったと思われる。

『佐竹氏関連中世の城館址』 梶山義光 著
『続・図説 茨城の城郭 3 常陸太田市編』 茨城城郭研究会 県北支部
『北緯 37 度付近の中世城郭』 茨城城郭研究会

4. 常寂光寺

利員城跡南方の鷺山の中腹にある。開会山常寂光寺と号す。本尊は釈迦牟尼仏。宗派は日蓮宗。

『開基帳』によれば、

常寂光寺は、はじめ鏡徳寺の末寺で真蔵院鷺寺と号していた。元禄9年(1696)、徳川光圀公に招かれた日周上人が、それまで鷺寺とよばれていたこの寺を新たに開山した。光圀公は稻木村にある久昌寺の末寺とし、日蓮宗に改宗した。

この時、地元民は光圀公より改宗を命ぜられたが、これを強く拒んだという。

境内には七面堂があり、日蓮宗の守護神「七面大明神」が祀られている。光圀公がこの寺を訪れた際、源義家が前九年の役の際に立ち寄って植えたという「枝垂れ桜(糸桜)」に感激し、境内にある石碑に詩が刻まれている。現在ある「枝垂れ桜」は二代目にあたるという。

法の花 ひもときそめて いく年の
数もつきせぬ 花にさかえん

『金砂郷村史』
『光圀公ゆかりの寺巡り』 常陸太田の黄門様検定会



日蓮宗常寂光寺

5. 鬼子母神

「きしもじん」とか「きしほじん」という。

夜叉毘沙門天(クベーラ)の部下の武将八大夜叉大将(バーンチカ)の妻は、500人(一説には千人または一万人とも)の子の母であった。これらの子たちを育てるだけの栄養をつけるために、人間の子を捕らえて食べていた。そのため多くの人間から恐れられていた。

それをみかねた釈迦は、彼女が最も愛していた末子のピンガラを鉢に入れて隠した。彼女は半狂乱となって、世界中を7日間探し回ったが発見には至らず、釈迦に助けを求めるようになった。

そこで釈迦は、「多くの子を持ちながら、一人を失っただけでおまえはそれだけ嘆き悲しんでいる。それなら、ただ一人の子を失う親の苦しみはいかほどであろうか。」と諭し、「戒めを受け、人々をおびやかすのをやめなさい。そうすればすぐにピンガラに会えるだろう。」と言った。彼女が承諾し、三宝に帰依すると、釈迦は隠していた子を戻した。そして、五戒を守り、施食によって飢えを満たすこと等を教えた。

こうして彼女は仏法の守護神となり、子どもと安産の守り神となった。インドでは、子授け、安産、子育ての神として祀られ、日本でも子授け、安産を願って鬼子母神を本尊として祀る習慣が定着した。

鬼子母神は、法華経の守護神として日蓮宗や法華宗の寺院で祀られることが多い。この中利員町では、主に子孫繁栄等を願って3月の初祈祷と7月の夜まちが現在でも行われている。現在のご神体は、自然倒木した榎の大木を材料としてつくったものを奉納したという。



中利員町にある鬼子母神

『日本民俗大辞典』 吉川弘文館
『ひたちおおたてくてくウォーク 中利員編』 市教育委員会文化課

いみあけ 6. 忌明天神

あめのふとだまのみこと
天太玉命を祖神とする。

不幸などがあった際に、早く忌みが明けて、同じことが起こらないように、ここで祈願する。近隣の家々では毎年2月に参拝供養をしているという。



忌明天神

『ひたちおおたてくてくウォーク 中利員編』 市教育委員会文化課

7. 石仏群

雷神様や鬼子母神、山の神、甲子供養塔などの石仏がある。近くのゴルフ場造成工事の際、この地に集められた石仏であるという。



旧北中裏山の石仏群

『ひたちおおたてくてくウォーク 中利員編』 市教育委員会文化課

(1) 南無足尾山の神石碑

足尾供養塔は、面足命(おもたるのみこと)を祀る。面(顔)や足の字からすると、人間の体を司る神といえる。足にご利益がある神様。つまり、足の病を治す神様の供養塔と考えられる。

また、山の神は山に宿る神の総称である。山の神は一般的には女神であるとされている。

農民の間では、春になると山の神が山から降りてきて田の神となり、秋には再び山に戻るという信仰がある。農民に限らず、日本では死者は山地の常世にいって祖靈となり子孫を見守るという信仰もある。

猟師、炭焼きなど山の仕事人にとっての山の神は、自分たちの仕事場である山を守護する神である。



南無足尾山の神石碑

『日本民俗大辞典』 吉川弘文館

(2) 甲子供養塔

甲子供養は、十支の最初の甲(きのえ)と十二支の最初の子(ね)を組み合わせた甲子の日に行う行事である。その行事を「甲子待ち」という。

大黒天を祀ってすごす行事である。豊作や商売繁盛を祈った行事(講)といわれている。



甲子供養塔

『日本民俗大辞典』 吉川弘文館

(3) 雷神様

ご祭神 別雷命(わけいかずちのみこと)

雷神様とは、雷の神様である。「雷神さん」の呼称で参拝者から親しまれている。

落雷除けや雨乞い祈願、また、江戸時代からの伝承祈願である取子(子どもの命名)、成長祈願などにもご利益があるとされる。



雷神様

『日本民俗大辞典』 吉川弘文館

8. 馬力神

馬の守護神である。

愛馬の供養のために建立されたもので、自然石に「馬力神」と刻んだもののかなに、紀年銘と建立者を記すだけのものが多い。

江戸幕末に出現し、明治時代に最も多く建立された。これは、廢仏毀釈の影響によるものと思われる。



馬力神

『日本民俗大辞典』 吉川弘文館